

特 39

417

勸
三郎著
卷之三
心
好
心

全

第三百二十七號

圖書刊行

明治七年一月刊

島次三郎著
深澤菱澤書



勸農辰子行末

東京書賣
富山堂
存誠閣
發行

特39
117

勸農辰初學

嶋桂澤著

總統

夫走國在治也

明治七年一月刊

島次三郎著
深澤菱澤書



勸農辰之先事

東京書賣
富山堂
存誠園發兌

特39
417

勸農辰初學

嶋桂澤著



夫是國之治也

天下を平らむは
能術よりおこなふ
農事を第一箇乃
大事なるを知る

らび士君子多く
を實業を推して
虚言を尚む或は
泥士を穿ちあはる

死を嘗糞汁を
荷ふ者或見是
を。之をり是を
賤ん。舉世移

美より流きて農
學を講明せし
小國の志は屬
疎る民食物

飢^{うゑ}るもあま^{あま}那^なも
餓^{うゑ}殍^ぼま^まる^るも^も阿^あも
耳^{みみ}至^{いた}る^る教^{しよ}言^ごめ^めも
遍^{あま}る^る也^や書^{しよ}經^{きよ}よ

以^も不^ふ惟^た天^{てん}恤^{しよ}民^{たみ}も
萬^{ばん}物^{ぶつ}を^を生^{せい}ず^すも
人^{ひと}民^{たみ}の^の養^{やしよ}料^{りやう}と
為^なる^る賜^{たま}ふ^ふ也^や

其の食料を輕ん
去る種殖曲豊熟の
道を備めさるる
嘆息の至りあり。

然るも今や白王國
乃世運駿と
て日小開化り
海外萬國を

交^{まじ}り^ハを^を結^{むす}ぶ^ハ也^{ナリ}
内^{うち}外^{そと}乃^ハ物^{もの}産^うま^ハる^ハを^を
貿^あ易^いと^スる^ハ也^{ナリ}
あ^ハら^ハま^ハる^ハ彼^{かの}養^{やう}食^{じき}稽^き古^こ也^{ナリ}

製^{せい}茶^{ちや}乃^ハ術^{じゆつ}也^{ナリ}
精^{せい}を^を以^もつ^ハて^ハ新^{あらた}し^ク
有^あり^ハ是^{こゝ}に^ニお^おか^かす^ハ也^{ナリ}
の^の農^{のう}事^じの^の監^{かん}字^じ也^{ナリ}

以て勉めたりし
らに今持て生
産を興じたり
と思ふに宜く百

姓越善道小守
ま能く耕耘培
善乃徳を研究
を心し其百

姓を教道可とする
其能く農事よ
熟練する人を撰
之其官を去る

然亦周旋を
了す若くは
昔唐土とて幽
を開き公卿

百姓を教導す
人心を懐く
爲り田賑を云
官越立く大人ひ

國乃富を云
と云扶をり
賑を所謂曲免務の
在活人ある能

農心くわん子こ小こ達たつ性せい
質しつ温おん和わ存ぞん有ゆう老らう人じん
誠まこと摺すり心こころ一いつ心こころ一いつ心こころ一いつ
村むら落らくをを巡めぐ迴めぐりりて

農のう務む如ごと勤きん惰だをを
監かん心こころ一いつ心こころ一いつ心こころ一いつ
存ぞん有ゆう老らう人じん
或あるをを放はな恣しをを戒かい

多^{おほ}く^まま^まく^く起^{おこ}て^お呼^よん^ん
寐^ねぬ^ぬ萬^{まん}事^じを^を配^{くわい}
多^{おほ}く^く一^{いつ}時^じの^の閑^{かん}
暇^{ひま}を^を勤^{しん}免^{めん}

有^あれ^れる^る身^み體^{たい}壯^{さう}
健^{けん}の^の者^{もの}を^を好^{この}む^む
勤^{しん}免^{めん}難^{がた}に^に故^{ゆゑ}
壯^{さう}者^{もの}と^と難^{がた}に^に人^{ひと}

物小因多任
休田後
冬平生の行
正 節 儉 誠 考

如 奢 移 如
事 誠 為 海
喜 福 在 待
江 湖

乃雜談乃 雑談古古今今也。
幼者幼者ままのの親親あり。
者者のの弱弱めめるる存存
才才能能道道をを從從まます。

其其古古事事ありありとと論論
一一長者長者のの仁仁並並
義義烈烈のの從從信信也。
之之其其人人物物もも因因り

物事ものことも辭ことば者ものて示しめ
さんさん心こころをを用もちぬ。
毎月毎月必かならずままをを用もちぬ。
能よく社しゃ佛ぶつもも用もちぬ。

誤あやま教まがをを好このむむ
先まづ三さん箇かん箇かん條じょうのの所ところ
教まがりり從したがひひ活くわ款かん
意い心しん如ごとくくああるるままをを

知らしめ敬神
愛國の念を起す
しめ天理人道を
辨わかしむ日ひより善ぜん

不就あきまらず人ひと氣き
和わ睦ぼく同心協力
志しをを普ふ及くをを見み
翁おきな又また村むら内うち子こ

善者あは官せん
告つが多その其行かこひを
賞あゆし悪人あくを怒おん
子こ殺ころ滅めつををくく人に

若もし改心かいかんされ
多おほ連つら子こ其物そのものを
法はふ多おほ痛いたまま殺ころ多おほ
遇あひしむむむ事こと好このむ

古人の百餘年の
緩の如き如き
復た世を以て患
ある公事如

くおして憂へまはさ
一人ある時を是
同心するを如
ち多く生きたる也

實け乃り讓じやう小こ以い朱しゆ
小こ交かう是ぜ乃り赤あか乃り家か
乃り宜い乃り好こう
善ぜん乃り道どう乃り難なん

惡あく乃り易えき乃り人じん
乃り存ぞん乃り紀き乃り生せい乃り
教きやう乃り道どう乃り肝かん乃り要やう
乃り事じ乃り故こ

田た暖ぬ能よく心こころ附つく
惡あくを懲こらへ善ぜん哉や
賞しょう一いつ鯨くじら寡くわ力りき孤こ獨どく
のた事ことあましひまま多た

病びやう一いつ貧ひん窮きゆうしたる
者もの少すくく家かの業わざの次つぎ貧ひん
本ほんとなるる事こと
能よく工夫くわふを為なす

能く情之實を色に
し時如く
官令越えし貸與遣
去へし又甲乙争

園能事存人と起
らんと去る時
雙方より誤解
了成りしけり

分り濟き海江
とあり至らぬやう
心懸く又山川
乃位置地質然

好悪を念驗査し
あるれ丸を溝渾を
通し或る堤防
を築き或る倉

地を開き。阿まひ
皇々其を復し。
土地乃物産を
饒乎せんを

謀る。勉め之肥國
乃術を人止る終
始心を勸農了
用其官租税の

有女年長其關係
世後之能也收納
乃之能也後進
志多やう為さし志也

耕種培長
以て刈收穫也
至るや其心を勵
かして先立ちて

盡きしを以て年
中能行事小違ひ
まらんとて紙欲
し其概略を記す

去る左に如し
第一月を其前
年が農事終り
百姓はかゝりあり

穀物の積蔵を
事とすまは然き
暖國の土を尚培
養す

有つて心なる畑
起き水田の凍
と暖氣の日も
是を起す春

来乃備之。其門少。鳥獸之
獵。或之。本之。伐
之。新。之。為。家。人。也。

松之。安。之。也。也。也。
也。此。月。也。何。所
之。同。一。新。年。之
祝。之。時。之。也。

若き者如も
解又随意如遊
戲を為しあひ
酒ふ耽孝具

乘して持て
有る浮遊歩行
遂に口論あり起
志し身体不傷

る者ものも何なにれも
女むすめ色いろも弱よわきも本ほん
心を乱みだす。極たぎつ
陥おちつめもあありああららひ

博たかく奕あそびも染しみも本ほん業わざ
を心こころもささししも心こころも
児この徒たが黨どうも心こころも
其その家いへ産うままを破やぶる

え少くは故
田暖平生能く
教職を和へる
祝月あまふ至る

了右の事無事
や心けり
第二月を曲居事
悉く終る先月

よるしに閑歩一故

農辰夫を花を

山猿さるるし

六寒中を程叙

絨精撥さるる

水も浸はたる種

粗を生氣盛ん

志も早損は傷

少く其寶も亦
極るるりまて業
苴を子老さく
空紀る実を妙

効あるま田暖能く
是等之事誠也
周旋さく其化
人家需而用の品也

寒製を良し
者多し。
茅三月を農家
ふあつて。音子用解

多き時と云ふ故に
閑に乗じて犁耜
鋤耨金鋤鑄鏡椽
お竹耜連耜

磨石純石純石の葉
園儀等の表草履
草鞋馬踏お玉
かきし年中用うる

所乃農之を盡く
修理を加置し
来月小至の曲
務如多し

右木の事を為ら
能くもこれぞ有る
又土地の事因
る此月種を
下

つきいそ能く
種ある
庭に
暖是れ
を
心得
す
第四月
冬
餘寒

早より随て去る暖
和漸く催はる如
時小當りまて農
事進ふ旬は耕

種まき作物甚
多し。
五月の暖気
おほひ小催し。

茶物費生れ以
まほれ亦随子
巻を架ゆる
田はをを耕

報諸の草末
を種植はるの時
農事漸
忙を志く女工を

養蚕種蠶の事起る。
田畠預め田疇
志多き多く桑を
仕付させ六種紙

紙を買ひかへ
次貝金母者
官金を貸
巻く券見物見

如子當之。女生綿
給孫。亦茂密。其
其利。其。廣大。
子。如。

茅。六。自。之。陰。種。
此。作。物。悉。之。成。
當。不。陽。種。以。化。
物。之。耕。程。之。也。

能時と一と志し是こ
其數その甚う多べ一と多ほ少ふ一と
最も多た一と忙い如い有うと
是こ時と結むす體たい也なり又また

大おほ一と生せい長ちやう一と桑そう
成なり食く少すく一と夥おほ
々々々々々々葉はをを摘とて
與あ一と少すく一と味あ多た一と

條えいぶ小付こづしたる儘じま
志しの多たの食くををむ
る少すをを
第だい七月しちがつの来きた年ねんを

刈かり田た植うええししまま
番ばん人にん小始こはじまま一いち年ねん
乃の業わざののりりらら如ごとく
月つき銭せん以もつてて最さいも

多端有孝之
田賤之心在
用之百姓之勉
勵也。 勉也。 子

手後建好
也。 亦去之。 此時
手順在失
獲也。 是程也

過一年中他子
可退在進想豆饒
在多年是相也
能多事子以年所

勉強老老所
古往知也之亦既不
老息也

第八月六日

野まきの故田
地ふ水乾灌
と行要の農
事志の起中も。

耘耔培のそと
弱と行の三伏
中尖熱烈な夏
作物豊熟の如

好時節ありて然
き如く是暑氣甚
敷多し灌水の
不足なること記す。

宜しく雨乞の祭
に成りて旱損
を免むること如
水心す又此月

孝丸自之至
能百陰兩降續
去之少可の事候
左之如之記之定也

三也善之有也
防之小治之由灌
照水及之温事
殺之未如法也

里田暖ま心
用い

第九月早稲
既生烟物

瓜豆の影
皆熟此月
也
秋

幸^あ運^い退^ひして備^{そな}はる終^は
時^{とき}ふ幸^あふと^と田^い暖^あ能^い
く配^まふ由^{よし}しと強^あめ
寒^{かん}苦^くを防^ふぐ終^は

備^{そな}を為^なすしとむ
魚^い

第十^ふ月^げ々中^{ちゆう}稻^{たう}
己^こふ成^{せい}る年^{ねん}の

成熟して稲宮の
向種は作物熟
去るより陰種は
作物を耕種する

時り違ふ旬は
亦果實の剥去
すまは種を
屋へ蓆を刈

里。壺。瓢。を。採。所。
此。時。麻。葉。か。や。し。
大。ひ。ふ。長。は。去。月。
動。し。ま。さ。き。の。大。風。

多。あ。の。こ。も。あ。或。者。
水。換。ふ。及。ふ。こ。も。
あ。も。田。暖。く。出。
水。の。御。宗。子。浪。色。

去る

第十一月の晩福

そのほかの法外も多
く其成就は是

亦於て了了獲

取て收斂の自配

を以て為し安んず

傷心諸草未了

皆夫より獲物を
為し諸子に与ふ
を防ぐ如用之
要あり。

第十二月を諸物
皆集めたりと因
りて其多し物
を以て握りて

之付平極の季。
穀物を自備法他
物不悉くは收む
べし又此日をもとむ

一年乃結構る也
其何事を結早
く其に付も成る
と其且借債の令

計を極むる事
有是を貧究あり
之は是を償ふ
少難く延即ち既

迫る事月来を
孝女是を以て
能く裁
多事と奪むる

但ぢ亦も困こ難ん一い又また
田た畑はをを質ち入いるる
難なん澁じ此このの如ごとく
ああららひひをを其その代しろりりあるある

まままままままままままままままま
其その自みづからら踏ふまますす
死しををととあありり又また
井せい底てい川せん流りゅう身み

斯る非命の死亡
多と母まう極う路
かへく夫ま田畠
水官もも也物産を

聞ま土功を起
穀物を豊うのり
せんう者ふ百姓を
志ま子曲る子を勉

勵き一先共々心
力を盡して富貴
を慕はざらん
民を蕃殖せしむ

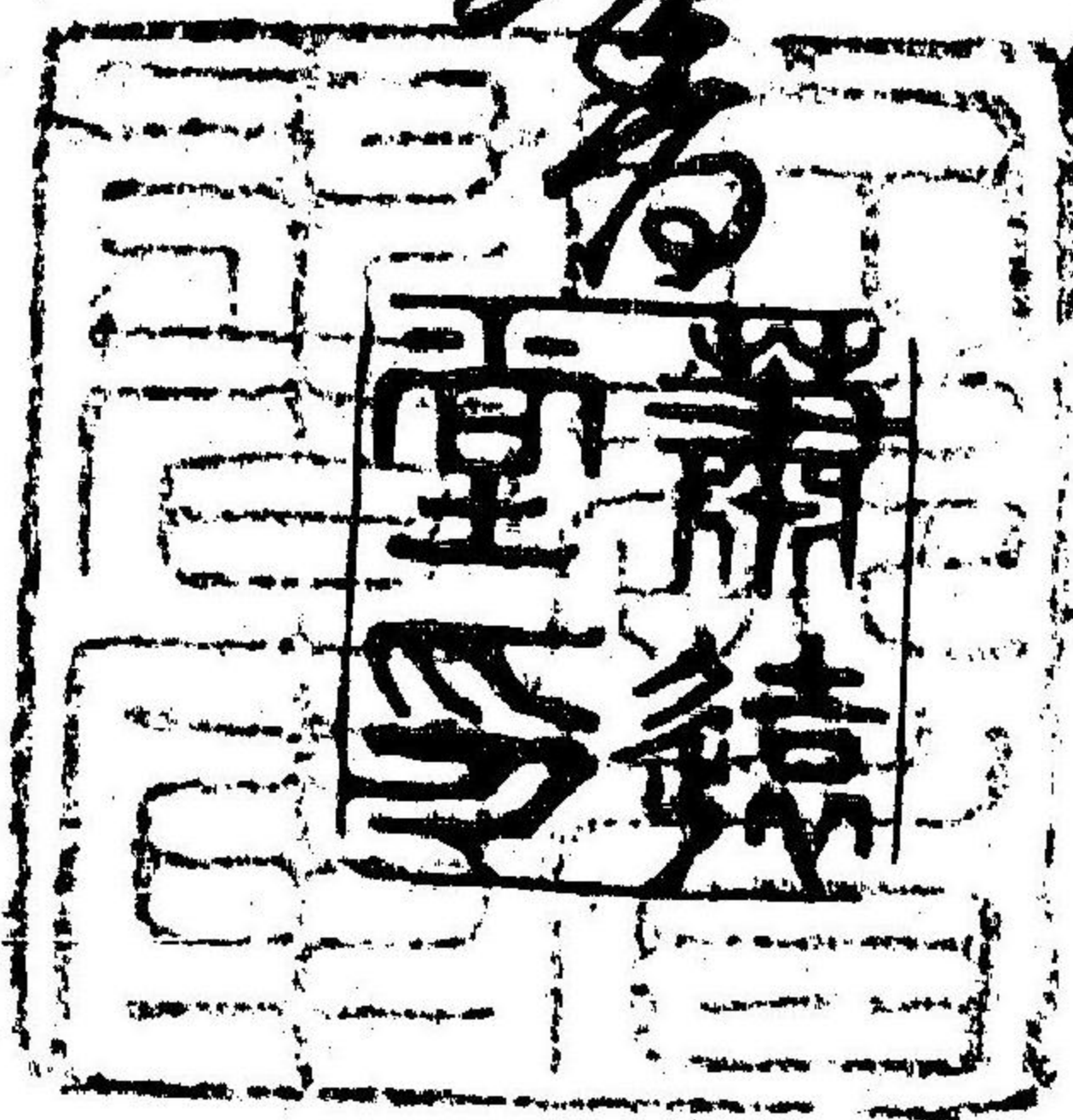
以て功と爲す
小業を爲す
命の祀をたむ
孝妻ある子の
教を授け

了如も其の如く
音え大なる如
故も平者より故
戒も以て其の職

業を勉め其
むるも其の如く
心を其の如く
國恩の厚き事

報 砂 志 通

養 澤 書



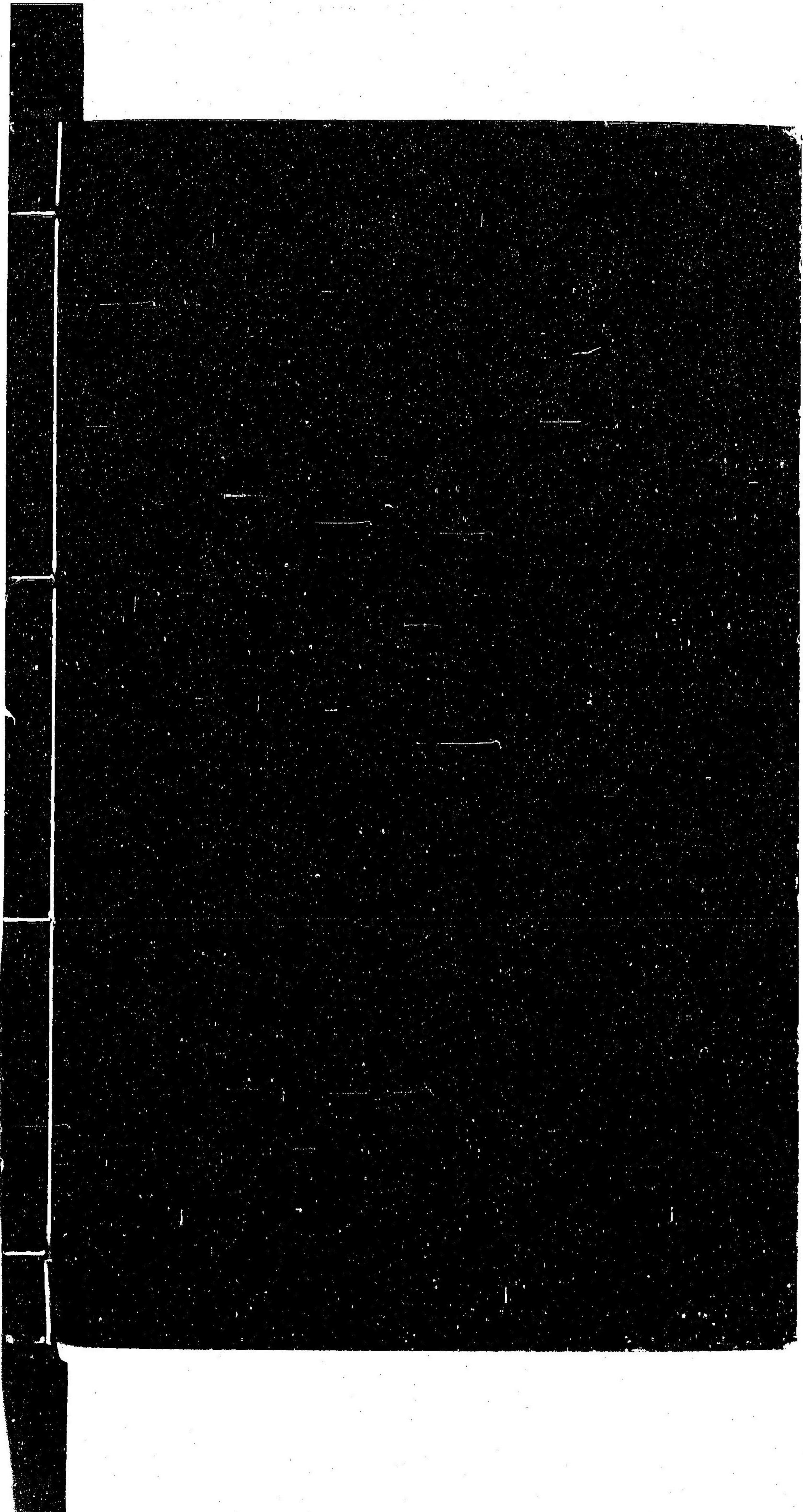
勸 農 初 學

萬 笈 閣 發 兌 目 錄

西 洋 開 拓 新 說	緒 方 正 譯	二 冊
同 水 利 新 說	若 山 儀 一 譯	三 冊
同 農 家 訓	神 田 豐 譯	二 冊
農 家 必 携	總 生 寬 著	二 冊
同 必 讀	大 藏 永 常 著	三 冊
桑 茶 蠶 機 織 圖 會	梅 殿 通 文 著	二 冊
養 蠶 圖 解	平 亭 銀 雞 著	一 冊
植 學 略 解	文 部 省 御 藏 板 翻 刻	一 冊
農 家 教 草	島 治 三 郎 著	一 冊

養蠶手引草	日本植物圖說	新訂草木圖說	富國の基	農業往來	地方往來	農學往來	勸農初學	農家心得草
朝野泰彦撰	伊藤先生著	飯沼慈齋著	島村泰著	同著	卷菱澤著	總生寬著	同著	島治三郎著
一冊	一冊	九冊	一冊	二冊	二冊	四冊	一冊	一冊

萬笈閣製本各地專賣書籍館		江島喜兵衛	
北畠茂兵衛	稻田佐兵衛	山中兵衛	小林新兵衛
九家善七	村上勘兵衛	中村佐助	牧野吉兵衛
柳川梅次郎	水野慶次郎	京	東
林萬次郎	石川治兵衛	荒川藤兵衛	太田金右衛門
北澤伊八	朝倉久兵衛	青山清吉	鈴木忠藏
山中孝之助	山中北郎	京	東



特 39
417

勸農初学

第三百五十七號
文部省書庫

061633-000-7

特 39-417

勸農初学

島 桂潭 / 著

M7

CCA-0263

